

## 段落とパラグラフの構造と方法について

● 村 越 行 雄

### 1. はじめに

日本語で何かを書く時にいつも悩まされるのが、日本語における句読点の打ち方と段落とパラグラフの区切り方である。それは、学校で習った記憶がなく、また明確に記述された本などがなく、慣習的に定められた原則もないからである。文作成や文章作成の際に、頼るべき基準がなく、従って人によって異なり、様々な形が存在し、あたかも好きなように勝手にできるかのような感じさえ抱くことになる。そのような状況を明確にする目的で、句読点、そして段落とパラグラフについて分析を行うことにするが、前者はすでに2つの論文で発表したこともあり<sup>(1)</sup>、今回は後者の分析を行うことにする<sup>(2)</sup>。

### 2. 段落とパラグラフの捉え方について

今回使用した14の資料だけを見ても、段落とパラグラフを区別する捉え方、段落に一本化する捉え方、パラグラフに一本化する捉え方の3つが存在していることが分かる。勿論、「段落」は英語の paragraph を日本語に翻訳した語であって、その点から見れば、「段落」と「パラグラフ」は同一の意味を持つはずであるが、実際には「日本語の段落」と「英語のパラグラフ」という形で、意味的に区別され、それぞれが異なる領域を示すようになっている。

このような翻訳語の相違（同一の paragraph から生まれる、漢語としての「段落」（意味的に同一の漢語が選ばれる）とカタカナ語としての「パラグラフ」（音的に同一のカタカナ表記がなされる）の相違）は、日常的にもよく見られるもので、決して珍しいものではない。ただし、誤解を生むのは確かであろう。少し異なる例になるが、宿泊施設を意味する和語の「宿」、漢語の「旅館」、そしてカタカナ語の「ホテル」は、日本では異なるものとして認識され、宿と旅館とホテルが同一のものを指す語であると思う人はいないであろう。同様の例は日本語だけでなく、英語にも見られる。「質問する」を意味する語として、古英語としての ask、古フランス語としての question、そしてラテン語としての interrogare の3つがあり、用法はそれぞれ異なっている。なお、共通するのは、日本語における日本→中国→欧米と英語におけるイギリス→フランス→ローマ帝国となり、右に行くほど高い文化を示し、従って右の語ほど高度な意味合いとなる。

そこで、今回の資料を段落とパラグラフによって示せば、外山滋比古（2010）では、「段落」と「パラグラフ」の語が同一のものとして自由に言い換えながら使用されており、木下是雄（1990）では、「段落」とは明確に区別される「パラグラフ」が前面に出され、その妥当性が強調され、石黒圭では、「段落」と「パラグラフ」を区別し、「パラグラフ」の立場を取って「段落」を解釈し、「パラグラフ」の意味合いで「段落」が使用される（石黒，2009）一方で、区別なしに「パラグラフ」を含め、その意味合いで「段落」のみが使用され（石黒，2014）、古郡廷治では、「段落」のみが使用され、「段落（パラグラフ）」として「パラグラフ」の意味として「段落」が使用

され（古郡，2014）、また区別なしに、「段落」が「パラグラフ」の内容で使用され、段落＝パラグラフとして捉えられ（古郡，2006）、三浦順治では、「段落」と「パラグラフ」を明確に区別した上で、「段落（パラグラフ）」が使用され、「パラグラフ」を意味する内容として「段落」が使用される（三浦，2009）が、それとは反対に、「段落」と「パラグラフ」を区別しながらも「パラグラフ」のみが使用され（三浦，2012）、意味内容としては同一の「パラグラフ」であるが、一方でその意味で「段落」が使用され、他方では同じその意味で「パラグラフ」が使用されており、井下千似子（2013）では、「パラグラフ」のみが使用され、西田みどり（2012）でも、「パラグラフ」のみが使用され、八木和久（2007）では、「段落」のみが使用され、「段落はパラグラフともいわれます」と言って、「パラグラフ」の意味で「段落」が使用され、阿部紘久（2013）では、「段落」のみが使用され、渡辺哲司（2013）では、「段落」と「パラグラフ」について、根深い相違を明確にする一方で、その意外な接点も認識した上で、「パラグラフ」、特に英語の「パラグラフ」を前面に出し（英語のパラグラフに基づく作文法はあくまでも1つの方法であって、フランスには異なる方法があると言われる）、泉忠司（2009）では、「段落」と「パラグラフ」を区別した上で、「パラグラフ」のみが使用される。

以上の11名の筆者、14冊の著書を見ただけでも、「段落」と「パラグラフ」の捉え方がいかに異なっているのかが明らかになる。しかし、そのような相違が表面上見られるが、ただ「段落」という語は「パラグラフ」の意味内容で使用され、従って日本語の段落が英語のパラグラフの意味で使用されている点では、共通している。その相違は、「段落」のみを使用するのか、「パラグラフ」のみを使用するのか、さらにまた「段落（パラグラフ）」（段落＝パラグラフ）を使用するのか、それは別にして、日本語の「段落」と英語の「パラグラフ」の区別を明確に認識してそれをはっきりと表に出すのか、それとも段落＝パラグラフを前提にして（英語の paragraph を翻訳した語が「段落」であり、同一の意味であることを前提にしている）、そのことにはふれないのか、その違いである。

勿論、今回使用した資料は全て英語のパラグラフ志向のものであったが、それ以外にも、日本語の段落志向のものもあるはずで、今回の資料だけで文章作成の方法として英語のパラグラフの正当性が示されたとは言えない。ただし、今回の資料が全て一般の書店で売られている、一般学習者向けのテキストとして入手可能なものであり、そのことを考慮すれば、一般の人たちへの影響の大きさを感じ取ることができるし、それだけに意味深いものであると言える。つまり、現在の日本における文章作成方法として主流になっているのがパラグラフ（たとえ「段落」であっても、「パラグラフ」であっても、共にパラグラフの意味で使用されている）であって、それが単純に段落＝パラグラフ（翻訳語としての同一意味）の結果なのか、それとも日本語の段落と英語のパラグラフの区別を認識した上で、日本語の段落が英語のパラグラフのようになるべきであるとの信念なのか、たとえ「段落」、「パラグラフ」、「段落（パラグラフ）」のどれを使用するのかは別にして、それが根底にある。

### 3. 段落とパラグラフの区別について

「段落」と「パラグラフ」の語の使用について述べてきたが、その問題には日本語の段落と英語のパラグラフの間には、超えることのできない大きな溝が存在しているという一般的な認識が根本にある。

よく引き合いに出される外山滋比古と木下是雄を見ることにする。外山滋比古(2010: 58～59)は、

いまの学校では教えないことはないが、段落とはどういうものなのか、自分ではどういうパラグラフのつけ方をしているのか、それがはっきりしている人はそれほど多くないところを見ると、やはり、徹底した教育が行われているとは言えない

もともと、日本語にはパラグラフというものが無い。源氏物語などにも段落はないのである。昔のことだけではない。

いまでも、手紙には段落をつけない方が正式になっている。たとえば毛筆で巻紙に書く書簡には段落はつけない。長い間そういうことに慣れてきた日本人だから、つい、段落のことを忘れる。新聞も戦前は段落がはっきりしていなかった。

ところが、外国では、きわめて嚴重である。パラグラフのない文章は文章と認められない。明治になって、そういう外国の習慣を見て、真似をしたのが、段落であった。日本に入って、また、百年くらいしかかかっていない。しっかり根をおろしていなくてもしかたがないだろう。

と言う。

段落にしる、パラグラフにしる、学校で教えられてこなかったし、少なくとも徹底した形での教育は行われてこなかったこと、その根底には日本語と外国語の相違が存在すること、元々パラグラフを持たない日本語に外国からパラグラフを輸入し、それを真似たのが段落であること、しかもまた100年くらいしかたっておらず、しっかり根をおろしていないこと、などが記述されている。それによれば、1つには、学校で徹底した教育が行われなかったという学校教育の問題があり、その原因となっているのが、日本語と外国語が根本的に異なっているという言語の問題があり、さらにパラグラフを持たない日本語にパラグラフを輸入したのが段落であるが、また100年くらいで、根付くにはまだ時間が足りないという歴史の問題があることになる。従って、日本語の段落と外国語のパラグラフの相違は、根本的に異なる日本語と外国語の相違が存在し、パラグラフを輸入し、それを真似て段落にしたがまだ時間的な短さの為に根付いていないことに起因することになる。しかし、時間的経過を経れば、段落（パラグラフの輸入品）が根付いて、学校でも徹底して教えられ、結果的にその相違は解消するのであろうか。

そして、木下是雄（1990：161～162）は、

すべてのパラグラフを中心文を頭に置いて書けば、文章はたしかに読みやすく、わかりやすくなるが、日本語の場合にはそういう書き方をするためには相当の努力がいる。是は、私の考えでは、日本語の文の組み立て方—構文規則—に由来する。4.2.4節の最後でもマークしたように、多くの欧語はSVO型で、文頭の主語に述語がすぐつづく。SOV型の日本語では、文の要ともいべき述語が文末にくる。頭の中で考えるときも同じ順序のはずだ。この事情を反映して日本語では、どちらかというところ、中心文をパラグラフの最後に置くほうが書きやすいのである。

こういう事情があるので私は、先に「報告・説明・論述などの文章では各パラグラフの頭に中心文を書くほうがよるしい」とは述べたが、「是が非でも」という気はない。ただ、大原則としてパラグラフには中心文を書くべきだということは言っておきたい。中心文のないパラグラフは締まりのないものになりがちである。

と言う。

ここで鮮明に日本語の段落と欧語のパラグラフの相違が記述される（なお、日本語の段落には否定的で、その為に欧語のパラグラフを導入して「段落」を「パラグラフ」にしている）。今では一般的で、定説とも言えるようなものである。文章は文によって大きく影響され、さらに強く

言えば、規定されんとする考えで、文段階の構文規則である欧語の SVO 型と日本語の SOV 型が文章段階の段落書きを規定して、重要で、中心をなす核は前者では文頭に、後者では文末に来ることを受けて、段落でも中心文が最初に来たり、最後に来たりするとされる。それは、文が文章を規定し、文の構造がそのまま文章の構造に持ち込まれることを意味する。まさに、言語の問題、特に文段階の構文規則の問題になる。

もし文段階の構文規則が文章の構造を規定することを受け入れ、しかも欧語の段落を導入するのであれば、結果的には文の構造も SOV 型ではなく、SVO 型にすべきであると言うのであろうか。そうなれば、日本語の文法の根底を否定することにつながっていくことになってしまう。そのような危機感があるのかは分からないが、「頭の中で考えるときも同じ順序のはずだ」と言って、SOV 型の核を文末に置く方法が、単に日本語特有な特徴だけでなく、人間の一般的な考え方であり、人間特有な思考方法であるとされる。さらに、段落の最初に中心文を置くことに対して、「是が非でも」という気はないとされ、ただし「大原則として」中心文は書くべきで（最初でも、中間でも、最後でも）、中心文のない段落が「締まりのないもの」であるとされる。言い換えれば、欧語の段落を受け入れながらも、日本語の段落もできる範囲で容認し、だからこそ「是が非でも」を否定したり、「大原則として」と言ったりするのである。

ここでの大問題は、根本的に異質な文と文章について、文が文章に影響を与えとるか、さらに強めて、文が文章を規定するとか、そのような関係付け自体にある。さらに悪いことには、SVO 型と SOV 型という構文規則が一人歩きして、文だけでなく、文章にも、その他の様々な領域にまで適用され、あたかも日本語＝SOV 型の構文が日本人＝SOV 型人間であるかのように錯覚されてしまうことである。例えば、人間特有な思考方法にしても、重要で、中心をなす核が最後に来るような思考方法と最初に来るような思考方法がある訳で、それを文を超えて適用すること自体に無理がある。勿論、文段階として日本語が SOV 型であるのに対して、英語などの欧米語が SVO 型であることはすでに明白なことである。問題は、それを文を超えて、文章へと、さらに他の領域へと適用できるのかである。

木下是雄については、井下千似子 (2013:99)、西田みどり (2012:23)、泉忠治 (2009:142~143) などが引用している。特に、泉忠治は「日本語論文作成術の本で「段落・ライティング」を推奨しているのは、僕の知る限り、木下是雄『レポートの組み立て方』(ちくま学芸文庫)、小笠原誠『読み書きの技法』(ちくま新書)、RPG のところで紹介した戸田山和久『論文の教室』(NHK ブックス) の 3 冊だけ。それだけでも僕はこの 3 冊が論文作成術に関する名著だと思う。」と言うほど、絶賛している。これらの引用の多さは、SVO 型と SOV 型の構文規則による説明が深く浸透していることの現れを意味すると言える。

#### 4. 段落と段落の歴史的事情について

ここで段落と段落の関係について、歴史的事情を少し見ることにする。それは、そのような歴史認識が段落と段落を理解する上での必要不可欠な要素を成すと考えるからである。言い換えると、極めて曖昧な形で言語全般の問題として捉えられている為に、そこに潜む問題点が見えてこないからである。

今回の資料の内、歴史的事情を説明しているのは、三浦順治と渡辺哲司くらいで、特に渡辺哲司はかなり詳しく検討している。

三浦順治 (2012:70~71) による説明は、次のものである。明治時代に「段落」という

語が日本に入ってきて、この訳語として「段落」という語を当てた。しかし、それまでの日本には段落はなく、例えば、10世紀の紫式部の『源氏物語』も、13世紀の吉田兼行の『徒然草』も、17世紀の井原西鶴の『好色一代男』も段落はない。その為に、例えば、『源氏物語』の現代語訳にはいずれも段落はあるが、訳者の解釈によってなされており、改行の仕方は一定していないし、また英語訳にしても、アーサー・ウエイリーとエドワード・サイデンステッカーの翻訳では段落を付けているが、その改行場所は一致せず、翻訳者が付けた段落である。そして、明治20年頃には、欧米流の Paragraph ごとの改行、冒頭の字下がりの形式が行われるようになっていた。これが明治の作家の間で急速に広がったと推測され、当時の作品を見ると、全て形の上で字下がりはしている。Paragraph を「段落」として国定教科書に文部省が取り入れたのが明治36年と言われるが、形と一緒に内容も教えられてきたのかは疑わしい。例えば、節、段、章段、文段、Paragraph、わかち、くぎりのように、段落に相当する語が多くあるのは、いかに解釈が不安定だったかを示すものである。そして、現在の『国語表現』の教科書でさえ、段落という捉え方は重要であるとされながらも、どのように書かねばならないのかは教えない。最後に、「[段落]の理解は安定していないことから、「Paragraph」と同一視されて使用されることには懸念がある。」と下線を引いて強調する。

以上のように、日本には明治時代まで段落は存在せず、その後「Paragraph」が輸入され、その訳語として「段落」が付けられ、すでに明治20年頃までには欧米流の Paragraph ごとの改行と冒頭の字下がりの2つの形式は広く行われるようになり、明治36年には文部省が国定教科書に Paragraph を「段落」として取り入れたことになる。しかし、明治36年から現在まで、国語表現に関する教科書で段落の重要性は言われているが、形と内容が一致せず、「どのように書かねばならない」かは教えられていないとされるのである。その段落に対する理解度の低さが、段落と Paragraph を混同し、同一視する原因になっていると言われる。

歴史事情の記述には問題ないが、気になるのは、「欧米流の Paragraph」のように、アメリカとヨーロッパ全体を含めることである。同じ傾向は、前掲の外山滋比古の「外国」や木下是雄の「欧語」にも見られる。裏を返せば、Paragraph による書き方は、アメリカやヨーロッパ全体に共通して見られる一般的な傾向、典型的な現象であるかのような印象を受けてしまう。この考え方は広く行き渡り、Paragraph・ライティング＝欧米の作文法がある種の普遍性や一般性を持っているかのような印象になってしまっている。それに対する反論と解釈できるのが渡辺哲司である。勿論、彼が自ら批判するとか、反論するとか言っている訳ではなく、そのように位置づけられるという意味である。かなり詳しく歴史的事情を説明している。

渡辺哲司(2013:135~138)による説明は、次のものである。現在のような英語の Paragraph とそれにもとづく作文法は、19世紀後半のスコットランドおよびそれ以降のアメリカ合衆国に直接のルーツがある。最初に、1860~80年までスコットランド・アバディーン大学の論理学・修辞学教授であったアレクサンダー・ベインによって、今日のような〈Paragraph〉や〈トピックセンテンス〉が定められ、次にほどなくアメリカに伝わって洗練・普及され、20世紀後半に今の私たちが知るような形に仕上がった。そのような作文法の起源と発展の歴史を理解する上で重要になるのが、当時のスコットランドとアメリカの社会事情である。第1に、産業の発展によって豊かになった中間層が社会的成功の為に子弟へのよりよい教育を求めた。第2に、公教育の拡大により教育内容もより効率的かつ実用的なものへと変わることが求められた。第3に、人々の活動範囲が広がり、職業の分化や専門化が進み、異なる文化的背景や職能・知識を持った人同士が意思を通じ合わせる必要性が高まった。第4に、産業界からも、大規模・複雑化した生産現場の管

理者となるべき人材を育てることが求められた。これら4つの社会から求められた教育において、「最も重要な中身が、学ぶ意志のある人であれば誰でも学べ、使える英語のライティング技術だった」。それ以前の欧米のライティング技術は、一般的な人のものではなく、一部の特権的な人のもので、古代ギリシャ・ローマ時代から伝わる方法に従い、長年の修練によって身につけるものであった。そして、20世紀後半のアメリカにおける大学生激増により、例えば、パラグラフの先頭に主題文を置くなど、「より簡素で機能的な作文法や指導法の洗練が進んだ」。

現代的なパラグラフ・作文法の直接の起源がスコットランドとアメリカであることは、両国が英語文化圏の「へり」にあったことに無関係ではない。スコットランド（18世紀初めからイングランドに「合邦」を成す）では、新たに中等・高等教育を受けるようになった現地の人が使う言葉は、英語（“正統な”英語）ではなかった。アメリカでは、英語ではない言葉を使う移民が多かった。そのような状況の下では、「支配的な言語である英語を正しく使って実用的な文章を書く能力ことが、個人にとって社会的成功の条件となったことだろう」し、「国家の統一的な発展のためには、標準化されたライティング技術の普及が求められただろう」。

結論的に、「パラグラフにもとづく作文法は、ある特定の場所および状況下で、特定の問題を解決するためにつくられた書き方の1つにすぎないともいい得る。現に、例えばフランスでは、古代ローマ時代以来の伝統により忠実で、より複雑な作文法が高校・大学で教えられているという」。そして、誰でも学べ・使える簡便さと実用性を追求する基本理念には普遍的な価値があり、パラグラフを単なる「英語の話」としかみない人や“型”の指導を頑なに拒否する教師を批判して終える。

渡辺哲司の言うことに従えば、パラグラフ作文法は、決してアメリカやヨーロッパ全体の一般的な傾向、典型的な現象であった訳ではなく、あくまでも英語圏諸国において、しかも英語圏の「へり」という周辺部に位置するスコットランドとアメリカにおいて、しかもイングランド英語との関係で言えば、「正統な」英語を使えないスコットランド人やアメリカ移民において、誰でもが学べ、使える英語ライティング技術、標準化された英語ライティング技術のことになる。一言で言えば、英語を使えない人に英語を正しく書かせる為の技術である。それに加えて、アメリカ大学生の激増による書く能力の低下を支える為に、より簡素で機能的な作文法や指導法としてある。つまり、英語を使えない人に、それだけでなく英語を使える人にも、中等・高等教育を成功させる為に、必要不可欠なものとして英語ライティング技術が捉えられている。「話す」、「聞く」よりも高度な能力を必要とする「書く」は、大衆化されていく中等・高等教育では、レポートや論文を「書く」として求められ、誰もが（英語を使える人も、英語を使えない人も、全ての人）学べ、使える技術であることが必要になり、従って英語を効率的で、機能的で、実用的で、簡素で、簡便に「書く」ことが必要になる。そこにこそ、英語ライティング技術の真意があることになる。

特筆すべきことは、そのようなパラグラフ作文法があくまでも「ある特定の場所および状況下で、特定の問題を解決するためにつくられた書き方の一つにすぎない」とされることである。英語そしてそれ以外の言語のライティング技術全般において、英語ライティング技術＝英語パラグラフ作文法はあくまでも「書く」方法の中の1つの方法にすぎず、ある特定の時代の、ある特定の地域の、ある特定の状況の下での、ある特定の問題に対する、ある特定の解決の為に作られた書き方にすぎないのである。もしそう捉えることができるのであれば、英語のパラグラフとは関係なく、独自の日本語の段落が存在し得ることになり、日本語ライティング技術＝日本語段落作文法が可能になっていく。

さらに、渡辺哲司（2013：138～143）は、パラグラフと段落の根深い相違として、日本国語教育学会編「国語教育辞典 新装版」の「読解指導（4.1.3）」の中の項目「読解指導の目標内容」のところで取り上げられていることを根拠に、英語のパラグラフが書き方の指導事項であるのに対して、日本語の段落が読み方の指導事項であると言う。それに続けて、パラグラフと段落の意外な接点として、現代では互いに異なるパラグラフと段落は、大昔はどちらも同じであったと言い、英語ではかつて文と文（どこか語と語）の区切りさえなかった文章の中で文の切れ目を付けるマークをパラグラフと言ったのであり、日本語でも幕末の儒学者・海保漁村の『漁村文話』（1852年頃刊）を例にして、改行や字下げ（今日の形式段落）という形式的な指示が見られず、当時の文章一般に形式段落が見られないのと符合すると言う。そして、文の切れに付けるマークとしてのパラグラフ以前と改行と字下げという形式の段落以前の状況は同じであったが、その後、パラグラフの方だけが、ごく最近（19世紀後半）になって、スコットランドとアメリカという限定された地域で特殊な「進化」を遂げたと言い、さらにおもしろいのは、現代日本で教えられている段落（ふつうの段落、形式段落）は、冒頭の一字下げと1つの話題でのまとめなどが定義となるが、その定義が明治以降にアメリカから繰り返し紹介された英語のレトリック、あるいは文章構成法の理論が入り込んできたものであると言う。

今回の資料全般に言えることは、段落とパラグラフを区別していること、しかし「段落」、「パラグラフ」、「段落（パラグラフ）」など、どの語を使用していても、その意味する内容はパラグラフのことである。従って、用語上の相違があっても、意味上の相違はない（日本語の段落を英語のパラグラフに近づけ、同化させること）、とすることができる。それに対して、他の資料には見られないような視点から、つまり英語のパラグラフ＝書き方の指導事項と日本語の段落＝読み方の指導事項として、明確に段落とパラグラフが区別されるのである。

さらにまた、文章の中に全く区切りがなく、切れ目なく続くという同一の状況から出発し、その後、改行や字下げによる区切りがなされるようになったが、その過程は異なる進み方をしており、パラグラフの方だけが19世紀後半からスコットランドとアメリカで特殊な進化を遂げる過程であるのに対して、明治以降にアメリカから英語のレトリックを輸入することで現代日本の段落（形式段落）に至る過程がある。言い換えると、日本語の段落は元々何もない状態から、アメリカからの英語のパラグラフの輸入によって出来上がるものであって、その意味では、最初から日本語の段落は英語のパラグラフの意味であったし、現代でも変わらないことになる。裏を返せば、日本語特有な段落というものは最初から存在していなかったし、今でも存在していないことになる。在るのは、ただ英語のパラグラフのみとなる。そうであれば、今回の資料全般に共通している、どの語を使っている、結局はパラグラフの意味内容であることが説明できることになる。少なくとも、これが日本の現状である。

なお、日本語の段落と英語のパラグラフを明確に区別する根拠として、前者を形式段落として、後者を意味段落として捉えることがよくあるが、英語のパラグラフも、最初は文章を区切り、その切れ目に付けるマークであって、形式段落から始まり、それが意味段落へと進化していった訳で、強いて言えば、現代日本語の段落（＝形式段落）と現代英語のパラグラフ（＝意味段落）という形で対比することはできるが、そこにそれほど大きな相違が介在するとは考えにくい。例えば、区切りのない文章→区切りのある文章の過程は同一で、ただその区切りが形式段落で止まるのか、さらに進んで意味段落に行くのかの相違のように見えるが、単純に文字数や語数や行数のみによって区切ることはできず、必ず何らかの意味のまとまりによる区切りが伴ってくることになり、従って区切りはそれ自体で形式段落であると同時に、意味段落であるからである。

## 5. 文と文章について

歴史的事情に続いて気になるのが、段落と読点の扱い方である。それはまた、文と文章の関係という大きな問題に関わるものである。今回の資料で言えば、石黒圭（2009：238～239）は、段落と読点の共通性について、次のことを言う。

第1に、段落のない文章は読みにくいものであり、それは読点がない文章が読みにくいことに並行する現象である。文という単位は、文節という短い単位が集まってできているが、文節数が増えれば、文の正確な理解ができなくなり、長くなれば、どこで切って理解すればいいのかが分からなくなる為、読点という区切り符号が役に立つ。同様に、文章という単位は、文という短い単位が集まってできているが、文数が増えれば、文章の正確な理解ができなくなり、長くなれば、どこで切って理解すればいいのかが分からなくなる為、段落、すなわち「改行＋1字下げ」という区切り符号が役立つ。そして、読点によって「文内部の構造を視覚的にわかりやすく示す」ことになり、改行＋1字下げによって「文内部の構造を視覚的にわかりやすく示す」ことになる。

第2に、段落と読点は、その区切り方にいまだにはっきりした規準がなく、学校教育の現場できちんと教えられていない。勿論、その使い方には緩やかなルールがあり、多くの人が共通して区切る場合もあれば、人によって区切るところが一定せず、安定しない部分もある。つまり、ルールとして確立した規則性と、個人の裁量に委ねられた恣意性が互いに拮抗している点で、段落と読点は共通している。

これら2つが共通点として指摘されている。その主張に問題がある訳ではなく、むしろ妥当性があると言える。しかし、段落と読点の共通性のみを力説することで、そこに潜む問題が見なくなってしまう。文の中の区切りである読点と文章の中の区切りである段落は根本的に異なるものであって、それを軽視・無視するのは極めて危険である。例えば、上記のように、読点によって、そして同様に段落によって「文内部の構造を視覚的にわかりやすく示す」と言っているが、質的に異なる読点と段落が共に共通して「文内部の構造」を分かりやすくすると言っているが、一体どのようにしたら可能であるのか。勿論、「文内部の構造」と「文章内部の構造」という具合に区別するのであれば、理解できるが。

そこで、文と文章の関係について、少し見ていくことにする。文が幾つか集まって文章ができる訳で、文は文章の構成要素である。しかし、単純に文を複数つなげると自動的に文章になるような量的な移行ではなく、文と文章の間に質的な相違が存在するのである。なお、1語からなる1語文（例えば、「水！」と言って、「水が溢れている」を意図する場合）があるように、1文からなる「1文文章」というものもあっていいはずであって、そうなれば量的な判断自体ができなくなってしまう。

文と文章の相違を見る上で役に立つのが、言語研究領域の分類<sup>③</sup>である。目の前にある辞書を見ることにする。三省堂の『ウィズダム英和辞典 第3版』では、syntaxは統語論、統語法（単語が結びついて文を構成するときの規則及びその研究）と書かれている。また、大修館書店の『現代英文法事典』では、目次として、I：品詞（名詞、代名詞、動詞、助動詞・時制・相、形容詞、冠詞、数量詞、副詞、接続詞、前置詞、間投詞）、II：構文（分詞・動名詞・不定詞、関係詞節、疑問文、命令文、受動文、分裂文、there構文、比較、語順、省略）、III：意味論（指示、否定、意味役割、機能論、語用論、メタファー）と書かれている（なお、意味論の中に語用論を入れるのは現在では一般的ではないが、ともかく1つの文を対象にしている）。

統語論は語から構成される文の規則を研究する領域であり、英文法は語に関する品詞、文に関する構文、文に関する意味、それぞれの規則を研究する領域である。あくまでも文について、文



の内部構造（文を構成する語の関係）についてであって、決して文を超えることはなく、「文を超える」とは統語論や英文法では扱うことのできない、質的に異なる境域に属するものになっていく。言い換えると、厳密で、厳格な規則が適用できる対象が文に限定されることを意味し、「文を超える」はそのような規則が適用できないものになっていくことを意味する。

それに対して、語用論は、統語論のように言語（文）をそれ自体で純粹に言語的なものとして見るのではなく、言語使用者という人間が登場し、その人が言語をどのように実際に使用するかを研究することになる。具体的には、文ではなく、発話<sup>(4)</sup>が研究対象になる。それは、文を研究対象にする統語論などは、たとえどのような状況であっても、いつも必ず適用できる規則を研究することになり、そこに普遍性と規則性が絶えず存在することになる。例えば、交通規則のように、いつも必ず誰もが守らなければならない規則であって、その普遍性と規則性が交通事故を防ぐことになる。しかし、発話を研究対象にする語用論は、100%完璧な普遍性や規則性を求めるのではなく、むしろそれは現実を無視し、否定することであって、言語の実際の使用場面を重要視する観点から現実性と実際性を求めることになる。

また、発話は基本的には1つの発話としてある（1つの文のように）が、実際の場面では、1つの発話で終わることはなく、話し手と聞き手がいれば、必ず何らかの話のやりとり（exchange）が生じ、それが会話（converstion）になり、談話（discourse）になっていく。従って、語用論が扱うのは、単に発話ということではなく、発話を1つの単位として、それから構成される会話や談話であって、発話を構成単位とする会話・談話（＝発話の集合体）になる。

ここまで来ると明らかなように、統語論は文を対象に、文＝語の集合体（文＝語の組み合わせと言う方が一般的であるが）から文と語の関係である、文の内部構造を研究するが、語用論は発話を対象に、会話＝発話の集合体、談話＝発話の集合体から会話・談話と発話の関係である、会話・談話の内部構造を研究することになる。従って、両者の間には大きな相違が存在し、超えることのできない溝となっている。事実、統語論で世界的に有名な言語学者チョムスキーは語用論を否定して言語学＝統語論を強調するし、また語用論と言語哲学に大きな影響力を持つ哲学者サールはチョムスキーを批判し、語用論と言語哲学が主で、統語論が従であると力説するし、まさに超えることのできない溝が統語論と語用論の間に存在することがはっきりしてくる。

さらに、統語論と語用論の関係だけでなく、それ以外の研究領域でも同様のことは見られる。例えば、発話の集合体（文の集合体とも言われている）である会話や談話を研究する会話分析や談話分析がある。そして、言語学との関係で、実際の会話や談話を研究する社会言語学、言語心理学などがある。これらは全て「文を超える」を扱っている研究である。

以上のことを書き言葉に適用していけば、文と文章の間にかに大きな質的な相違が存在するのかが明らかになってくる。そして、文の中の区切りである読点と文章の中の区切りである段落を考える時、文と文章の境界線を簡単に乗り越えて、単純に読点と段落を同一視して共通性のみを強調するのは極めて危険である。

このような文と文章の境界線に気がつかない人は、石黒圭1人だけでなく、多くの人に見られる傾向で、むしろこちらの方が普通であって、一般的な傾向であると言える。従って、同じ問題を抱えているのである。例えば、すでに引用した木下是雄にもある。あくまでも文の段階にある構文規則のSVO型とSOV型によって、それとは全く質的に異なる文章の段階にある日本語の段落と英語のパラグラフを説明している。たとえ日本語がSOV型の構文で、英語がSVO型の構文であることが事実であると認めたとしても、それで同時に、それだけで日本語の段落と英語のパラグラフが同一の扱いを受けるべきであることにはならない。

文と文章の境界線をはっきり引くことで生まれる利点もある。今回の資料全般を見ても、また歴史的事情による過去の経緯を見ても、日本語の段落はその意味内容としては、結局英語のパラグラフになっているし、そのようになるべきであると考えられている。しかし、文から切り離して、文章のみを対象にすれば、日本語文法（文に関する規則）と英語文法（文に関する規則）には関係なく、それとは離れたところで展開できる訳で、従って日本語の段落に英語のパラグラフを入れ込むこともできるが、他方で日本語の段落に日本独特の内容を入れ込むこともできることになる。つまり、現在のように、英語のパラグラフを取り入れて、それに適合させることが唯一の目標ではなく、別の目標の設定も可能になる。

## 6. 段落とパラグラフの特徴づけについて

ここから段落とパラグラフの本格的な検討を始めるが、それ以前に歴史的事情と文と文章の関係を扱ったのは、明らかにしておく必要があったし、そのことで段落とパラグラフの関係がより鮮明に浮かび上がってくることになると考えたからである。

段落とパラグラフの特徴づけについては、様々な人が様々な言っているが、今回の資料に限って言えば、ほぼ同じようなことが言われている。比較する意味で列挙してみよう。

外山滋比古（2010：60）は、英語の文章では、パラグラフはまとまったことを言う単位で、このパラグラフを重ね行き、論文を書くが、丁度煉瓦のような役を果たし、積み重ねて行くといくらでも大部な論文になり、外国の論文ががっちりした構成をしていることが多いのは、単位としてのパラグラフが堅固だからである、と言い、そして日本語のパラグラフ、段落は一字下げて書き始めるという慣習は外国を模倣して違うところはないが、内部構造は全く自由で、しっかりしたパラグラフ感覚を持っている日本人は例外であって、書いていて、少し長くなってきたから、このあたりで改行して、気分を変えようか、そのような段落の付け方をしていることが少なく、形式段落であり、気分段落とも言え、英語のパラグラフとは異なる、と言う。

これによれば、英語のパラグラフはまとまったことを言う単位で、よく引用されるが、パラグラフ＝煉瓦にたとえられ、1つ1つがしっかりした煉瓦であるが故に、いくらでも積み重ねることができ、いくらでも大きな論文にすることができるが、それに反して、日本語のパラグラフ、段落は一字下げるといふ形式段落は外国からの模倣で変わらないが、その中身の内部構造は異なり、全く自由で、気分次第で、少し長くなると改行するような気分段落であって、英語のパラグラフとは異なることになる。つまり、英語のパラグラフは形式的には字下げと改行という形式段落を持つと同時に、内容的なまとまりのある単位であって、「内容段落」と言えるようなものであるのに対して、日本語の段落は「形式段落（＝気分段落）」と言えるもので、内容的には全く制約がなく、ただ単に勝手気ままに、気分次第で改行するだけとなる。

木下是雄（1990：156～157）は、「段落という日本語があるのにあえてパラグラフということばを使うには理由がある」と言って、その説明を行う。最初に、岩波国語辞典（第4版、1963）から「長い文章をいくつかのまとまった部分に分けた。その一くぎり。」を利用して、「かなり漠然としたものだ」と言い、「新しい段落は、行を変え、アタマを1字さげて書きはじめるのが明治以降のしきたりである。このしきたりを守って書かれた一くぎりの文の集合を形式段落と呼び、それがさらに意味上の上でも一つのまとまりを示している場合には意味段落と名づけるのが国語教育界の慣習らしい。」と言う。

次に、パラグラフについて、「文章の一区切りで、内容的に連結されたいくつかの文から成り、全体として、ある一つの話題についてある一つのこと（考え）を言う（記述する、主張する）も

の」と言い、上記の意味段落にやや近いが、もっと限定的な性格を持っており、欧文（特に、説明・論述文）はパラグラフを構成単位としてきっちと組み立てられるので、欧米のレトリックの授業では、文章論のいちばん大切な要素としてパラグラフの意義、パラグラフの書き方を徹底的に教え込んでいる、と言う。それについて、さらに

極端な言い方をすると、「まず一つ一つのパラグラフをきっちと書き、それらを積みあげ、ゆるぎなく連結して文章を組み立てよ」というのが欧米流の（説明・論述文の）文章作法である。パラグラフを煉瓦、文章を煉瓦建ての家と思えばいい。煉瓦がやわでは堅固な家はできない。

日本式の段落は、いわば一つづきの文章の方が先にあってそれを便宜的に切ったもの—という趣があって、パラグラフとは大分ちがうようである。

と言う。

これによれば、まず、日本語の段落は、長い文章をいくつかのまとまりに分けた、その1区切りのことで、かなり漠然としているが、明治以降のしきたりである改行と先頭の1字下げは引き継がれ、それを形式段落と呼び、加えて、それが意味的にも1つのまとまりを示していれば、意味段落と呼ぶ。一言で言えば、日本語の段落＝形式段落＋意味段落となる。次に、英語のパラグラフは、内容的にまとまりのある文の集合であるが、さらにある1つの話題について、ある1つのこと（考え）を言う（記述する、主張する）もので、意味段落とは類似するが、より限定的な性格を持つことになる。ここでは、意味的にまとまりのある文の集合としての意味段落とは区別して、あくまでも1つの話題について、あくまでも1つのこと（考え）を言う（記述する、主張する）ものとされ、かなり限定的なものになっている。逆に言えば、1つのパラグラフの中に、2つ以上の話題を入れることはできなくなり、また1つの話題について、2つ以上のもの（考え）を入れることもできなくなる。日本語の段落との相違をはっきりさせる為に、日本語の段落＝形式段落＋意味段落に対して、英語のパラグラフ＝形式段落＋意味段落＋1パラグラフ・1トピック・1アイデアとまとめることができる。

また、外山滋比古と同じ「煉瓦」のたとえが使用されている。パラグラフ＝煉瓦、文章＝煉瓦建ての家とされ、英語のパラグラフでは、まず1つ1つのパラグラフをきっちと書き（1つ1つの煉瓦をしっかりと作り）、それらを積み上げて（煉瓦を積み上げて）、ゆるぎなく連結した文章を組み立てる（堅固な煉瓦建ての家を建てる）のに対して、日本の段落では、まず文章があって、その後で便宜的に切ったものとされる。ここから、英語のパラグラフにおける小→大（文章の最小構成単位であるパラグラフ→文章）の流れとその逆の流れである日本語の段落における大→小（文章→便宜的に切断された部分）が見えてくる。

結局、2つの特徴づけによって区別されることになる。日本語の段落＝形式段落＋意味段落と日本語の段落＝大→小に対して、英語のパラグラフ＝形式段落＋意味段落＋1パラグラフ・1トピック・1アイデアと英語のパラグラフ＝小→大が対比されるのである。

石黒圭（2009：239～243）は、何人かの主張を使用して、自らの意見を述べていく。最初に、林四郎（「文章の構成」、『言語生活』、筑摩書房、1959：32）から引用する。段落をパラグラフの訳語とすることを問題にし、まず、段落は「段落を切る」を意味し、長い文章を段落に分ければ、いつかの文章になるが、どこどこで分けるか、悩まされ、慣らされた結果、「段落とは長いものを小間切れにされたものと考えようになった。」次に、パラグラフは読み取りの過程で浮かびあがってくるよりも、組み上げの過程で問題になるもので、大きな柱がまず立ち、柱が幹になって、そこから枝が出て、柱が編や章の表題名（タイトル）となり、枝がトピック・センテンス

となり、トピック・センテンスに葉を茂らせると実際の文章が出来上がり、葉を茂らせる方法は「定義づける」「細叙する」「例示する」「比較・対照する」「原因や結果を述べる」などがある。「パラグラフは、その中で首尾一貫した一つの統一体でなければならない。一つのパラグラフを書きあげることは、それだけで、一応作文の完成を意味するのである。」そして、「段落が大きなものを小さく切ったものであるのに対して、パラグラフは、小さなものを大きく太らしたものである。」結論的に、実例では一段落と一パラグラフが一致することが多いが、それらの語の意味は違っている。

その林四郎の主張について、石黒圭は1959年と今の事情は変わっておらず、日本の段落が読解のさいに長い文章を短く区切るものであり、欧米のパラグラフは作文のさいに肉付けをしていくものである、と言う。林四郎による段落とパラグラフの相違点は、段落が読み取り過程の問題であるのに対して、パラグラフが組み上げ過程の問題であること、そして段落が長いものを小間切れにされたもので、大きなものを小さく切ったものであるの対して、パラグラフが枝に葉を茂らせるもので、小さなものを大きく太らしたものであることの2つである。これら2つの点については、すでに見てきたように、渡辺哲司の英語のパラグラフ＝書き方の指導事項と日本語の段落＝読み方の指導事項の主張、そして木下是雄の英語のパラグラフ＝小→大と日本語の段落＝大→小の主張と同じものである。

次に、形態面と意味面から定義される段落について、形態面から見た段落（改行＋1字下げ）と意味面から見た段落（1つの意味的なまとまり）にズレが起きることを問題にする。例えば、常識的な意味の切れ目で切らずに、あえて別のところで切って特殊な表現効果を狙う場合などである。それに関連して、塚原鉄雄（『論理的段落と修辭的段落』、『表現研究』4 表現学会）の主張を紹介して、文章構造の論理的な展開として設定される段落を「論理的段落」と呼び、筆者の創作意図によって文章形成の実際的な定着として設定された段落を「修辭的段落」と呼ぶ、と言う。ただし、一般的には「形式段落」と「意味段落」で区別する方が一般的であると言って、参考程度で終えている。

さらに、形態面から見た段落を「形式段落」とし、意味面から見た段落を「意味段落」とした上で、「意味段落」に否定的な立場を取る永野賢（『文章論総説』、朝倉書店、1986：94-95）から引用する。「段落」を「形式段落」と「意味段落」に区別するのは国語教育の立場からであるが、それらの術語を使うことは適当ではないし、むしろ災いを引き起こす。問題になるのは、形の上での切れめ（改行）の箇所が意味段落という考え方の為は無視または軽視される傾向があることであり、それは名称が示すように、「形式にすぎないもの」よりも「意味にもとづくもの」を重んじるという考え方に根ざしている。しかし、いわゆる形式段落は、単なる形式ではない。切れめとして改行されるからには、改行されるだけの内容（意味）上の理由があるはずである。なんらかの意味の切れめとして改行になっているわけである、と言う。結論的に、「段落」はどこまでも「段落」である。形式とか意味とかで区別する必要はない。」と言う。

続けて、「意味段落」に肯定的な立場を取る市川孝（『国語教育のための文章論概説』、教育出版、1978：126）から引用する。実際には内容上の統一と形式上の改行が合致していない文章が少なくないので、内容上の統一に重点を置いて考える必要が出てくることになり、その場合、「文段」という用語を使って、「文段とは、一般に、文章の内部の文集合（もしくは1文）が、内容上のまとまりとして、相対的に他と区別される部分である」と限定することができる、と言う。

結局、石黒圭は、一般的に認知されている「形式段落」と「意味段落」の区別の仕方を受け入れた上で、特に問題にされてきた「意味段落」について、賛否両論を併記したにすぎない。なお、

特筆すべきは永野賢の「『段落』はどこまでも『段落』である」とする主張であろう。安易な仕分けは問題解決よりは、むしろ混乱を招く結果になるからである。

古郡廷治（2006：78～80）は、これまで問題にしてきた日本語の段落と英語のパラグラフの区別、段落の形式段落と意味段落への分類などについては全く言及せずに、日本語における「段落」について簡単に述べている。一つ以上の文を集めて段落ができ、一つ以上の段落を集めて文章ができ、段落は文章の論理展開上の構成要素となり、文と文の間を句点（。）で区切るように、段落と段落の間は「字下げ」によって区切られ、段落は改行し、一字目を空けて書き（英語の段落では二字から五字くらいの字下げをするが、文章の最初の段落は字下げなしで書くこともある）、段落の立て方としては、第1に、段落は論理展開の単位として、視点や主題を変えるときに立て、小説の文章で会話文の話者が変わるたびに新しい段落をたてるが、これも視点の変更であるし、第2に、段落は文が長々と続いたときも立て、適当なところで改行し、段落を新たにすると、文章が読みやすくなるからであり、その段落は、主題を持ち、その主題文は段落の中で核をなす文、論理展開の中心をなす文で、段落の中では、主題文以外の文は、主題文を表明したり、さらに詳しく考察したり、説明したり、例で示したりするが、主題はどの段落にもあるわけではなく、軽い文章には主題がない方が普通である。

古郡廷治の「段落」は、その意味内容から言えば、段落＝1つ以上の文の集合（段落＝1文を認める）と文章＝1つ以上の段落の集合（文章＝1段落を認める）になり、段落＝文章の論理展開の構成要素（文章の論理展開を構成する単位として、内容的に、意味的にまとまりがあるという意味であれば、「内容段落」とか「意味段落」とか言えるものであり、あくまでも論理的なまとまりであるとすれば、前掲の塚原鉄雄の「論理的段落」とも言えよう）であり、文の区切り＝句点のように、段落の区切り＝改行＋1字下げ（「形式段落」と言えるもの）になり、段落の区切る方法として、論理展開の単位として視点や主題を変える時に段落を区切り（論文、レポートなどの実用文章だけでなく、小説のような文章も同様の扱いを受ける）、また長い文章を読みやすくする為に適当なところで改行して、新たな段落にする、とまとめることができる。勿論、古郡廷治は括弧内のことは一切触れておらず、あくまでも段落とパラグラフの分類法を適用して解釈したにすぎない。

三浦順治（2012：68～69）は、まず、パラグラフは論理的文章にも文学的文章にもあるが、文学的文章の重点は感動、情緒、余情であり、時には情報を隠蔽したり、言いたいことも言わずに拒絶することもあるのに対して、論理的文章である実用文で言うパラグラフは大きく異なり、「正確に、はっきりわかりやすく、簡潔に書く」ことこそがパラグラフによる書き方である、と言う。また、パラグラフには最初に来るトピックの主題文を書き、どんな内容と順序でそれを説明するのかを決め、読む相手が読み終わったときに、読み始めよりも知識や情報が増えているように書く必要があり、それなしでは説得力あるパラグラフにはならないし、パラグラフの長さは、よく指摘されるように、文章が長くなりすぎて、「このあたりで適当にパラグラフを切ろう」というものではなく、パラグラフの読みやすさは長さではなく、考えの1つのまとまりであって、思いつきで適用に切っただけではいけない、と言う。

さらに、三浦順治（2009：112～114）は、まず段落（パラグラフ）は思考の単位であるとし、形式と内容の面から述べる。段落とは「字下がり書き始めてから改行の前まで」のことで、段落の初めが、行頭から1文字分字下げを行っていることから段落という言葉になった。ただ、最近では、パソコンのように、一行空けて字下げなしというのが増えてきている。内容とは「段落は文章の中のひと区切りで、『1つの話題』を明確な、説得力ある、関心を引く方法で展開す

る、文のつながりである」。

参考として、次のようにも言う。日本語の辞書で引くと「パラグラフ」＝「段落」としてもいのように説明されているが、大きな違いがある。それは、その展開の仕方である。日本語における段落は古来論理的な単位ではなく、息継ぎのための物理的な単位であって、論理的な単位として理解されるようになったのは昭和20年代以降、戦後になってからで、段落の構成単位である文（センテンス）が異常なほどに重視されたが、段落はひとつの改行箇所と次の改行箇所の区切りくらいにしか考えられてこなかった。英語の文章では、書き手が読み手を強く意識して書き、読み手をどのように自分に引き込むか、どのように説得するかを考えて書き、文章の一部であるパラグラフはその線にそって展開していく。

三浦順治の主張は、古郡廷治が実用文章（論文、レポートなど）と小説などの文章を同等扱いにして段落を捉えたとは反対に、まず論理的な文章と文学的文章を明確に区別し、両者の重点の相違として、「正確に、はっきりわかりやすく、簡潔に書く」ことに重点を置く論理的文章のような情報の開示が目的ではなく、感動と情緒と余情を与えることが文学的文章の目的で、情報の開示をあえてしないこともあるとされる。さらにまた、古郡廷治が文章を読みやすくする為に、長い文章を適当なところで改行し、段落を新たにすることを主張したが、それを真っ向から反対するのが三浦順治である。読みやすさは、あくまでも量的な長さではなく、質的な1つのまとまりであって、適当なところで、思いつきで切ることを否定する。それは、古来の日本語の段落が単なる「息継ぎ」という物理的な単位であって、決して論理的な単位ではなかったと言うことに通じるものである。勿論、段落（パラグラフ）が主題を持ち、その主題文とそれ以外の文（説明文など）から構成されるとする点で、一致する。

両者の比較はともかくとして、三浦順治によれば、日本語の段落は時代的に大きく2つに分けられ、昭和20年代以降（戦後）を境にして、それ以前は、物理的な単位である息継ぎの単位として、そして戦後は論理的な単位として位置づけられる。そして、その戦後における日本語の段落が、思考の単位と特徴づけられ、形式の面（「字下がり書き始めてから改行の前まで」）と内容の面（「段落は文章の中のひと区切りで、『1つの話題』を明確な、説得力ある、関心を引く方法で展開する、文のつながりである」）の両面から定義される。10世紀の『源氏物語』、13世紀の『徒然草』、17世紀の『好色一代男』には段落がなかったとされ、明治20年頃に欧米流のパラグラフごとの改行、冒頭の字下げの形式が行われ、明治36年に文部省がパラグラフを「段落」として国定教科書に取り入れたと言われてことを考えれば、明治以前には段落がなく、明治以降に欧米流のパラグラフが輸入され、「段落」と翻訳されたが、単なる息継ぎとして物理的な単位にすぎなかったが、昭和20年代以降の戦後になって初めて論理的な単位として理解されるようになるが、論理的な単位（思考の単位）の形の面が中心で内容の面はまだ理解されておらず、今それが求められている時代になっている、とまとめることができる。

今求められている日本語の段落（思考単位としての段落の内容の面）は、結局のところ、勿論文学的文章とは明確に区別される論理的な文章（実用文）に限定されることであるが、英語のパラグラフであり、古代ギリシャ・ローマ時代からの古典レトリックの説得力<sup>6)</sup>ということになる。説得力を目標とする論理的な文章を書く為に、その文章の1部であるパラグラフをその線に沿って説得力のあるものにすべきであり、それが日本語の段落に求められることになる。そう考えるからこそ、今の日本語の段落は、戦後論理的な単位として理解されるようになったが、段落の構成単位である文が異常なほどに重視され、1つの改行箇所と次の改行箇所の区切りくらいにしか理解していないと嘆くのである。つまり、形は整ったが、内容がなおざりにされていると思うから

である。

井下千以子(2013:99)は、ごく簡単に、日本語の段落はパラグラフの概念を輸入したもので、一区切りの文の集合として用いられてきたが、概念も用法も漠然としているとして、英語のパラグラフの基本的な考え方を推奨して、トピック・センテンスと支持文と結びの文の3つの要素から成り立つ構造で、パラグラフの冒頭を1文字分空けて書き始め、1つのパラグラフには1つのトピックだけにし、次に続く支持文でサポートの役割をさせ、主張を裏づけるように書くことで、自分の主張を読み手に明確に伝え、読み手を納得させる、と言う。なお、その考えは木下是雄(1990)によるものであると言っている。

単にテキスト的に簡単な書き方をしており、その主張の背景が全く分からないが、三浦順治の考えを使って言えば、現在の日本語の段落は、形の面だけが先行して、内容の面が欠落したままであり、それを補う為に、英語のパラグラフを導入して、日本語の段落の内容を埋めていく必要があると言うのであろう。英語のパラグラフの推奨と紹介であらう。

西田みどり(2012:23~24)も、井下千以子と同様、木下是雄(1990)の考えを受け入れて、英語のパラグラフの推奨と紹介を簡単に行っている。パラグラフは内容的にまとまりのあるもので、日本語で言う段落に近いが、イコールではなく、長い文章の切れ目程度で、厳密ではなく、改行の論理的規定すらない。一般的には、形式段落(改行して一字下げにする形式)と意味段落(いくつかの形式段落を意味や内容の統一性、関連性からまとめたもの、大段落とも呼ばれる、パラグラフはこれに近い)に分けて説明されるが、「レポートライティングについて」の名著『理科系の作文技術 レポートに組み立て方』の著者である元学習院大学学長・木下是雄氏と絶賛して引用する。パラグラフは、「文章の一区切りで、内容的に連結されたいくつかの文から成り、全体として、ある一つの話題についてある一つのこと(考え)を言う(記述する、主張する)ものである」と。さらに、レンガ造りの家のたとえも利用する。家全体を一つの文章と考えると、パラグラフはレンガの一つで、レンガ一つ一つが強固でなければ剛健な家が建てられないように、パラグラフが強固でなければよい文章は書けない、と言う。

また、井下千以子と同様に、パラグラフは、一つのトピック・センテンスといくつかのサブ・センテンスから構成され、前者はパラグラフの中心となる話題を提示し、後者でそれを支援し、補強し、支持することになり、一つのパラグラフには一つのトピックが原則である、と言う。なお、トピック・センテンスを「中心文」を呼び、サブ・センテンスを「支持文」と呼ぶこともあると言う。

内容的には変わらないので、説明は省略するが、1つ異なることがある。形式段落と意味段落については、1つの段落を形の面から見る場合と内容の意味の面から見る場合に分けるのが普通であり、従って形式段落と意味段落は実際には一致することが多いが、一致しない時に問題が起きると多くの人が言うのは、そのような捉え方をしているからである。しかし、そうではなく、1つではなく、複数の形式段落が意味や内容の面で統一性、関連性からまとめられたものが「意味段落」であると言われ、「大段落」と言われ、「パラグラフはこれに近い」と言われるのである。意味段落=複数の形式段落=大段落の説明がないので、真意は明らかでないが、かなり大きなパラグラフを、逆に言えば、かなり小さな段落を想定しているのであろうか？

八木和久(2007:18~19)は、さらに短い説明で終えており、パラグラフと段落の区別、日本語の段落の形と内容の両面などの言及はなく、従って現在の日本語の段落の問題の意識もなく(例えば、形の面のみが優先されてきたことを是正する為に、疎かにされてきた内容の面を新たなもので補うことの意識がなく、何が現実で、何が求められているのが混同されている)、段落を

簡単に説明する。あるひとつの改行からその次の改行までのひとくぎりの文の集合体のことを段落と呼び、「ある意味をもったまとまりごとに文章をくぎったものが段落である」といういい方もできるし、パラグラフともいわれます、と言う。

そして、集中力の関係で、そう長くは続かないので、ある程度の分量でくぎって段落を設けるのは理にかなったことであって、読者はそこでちょっとした息抜きができるからであり、段落の最初に1文字分の空白があると、視覚の面からも、説明の場面の変化を読者にはっきり認識させる効果が出るし、1行の段落が続くと、行頭が1文字分の空白のある行がいくつも続き、みばえがよくなる、と言う。

最初の説明は、段落とパラグラフ、形と内容などが混在し、境がなく混同され、理解しにくいものである。後半の説明は、「息抜き」、「視覚」、「みばえ」などの語は極めて主観的で、感覚的で、外山滋比古の「気分段落」や三浦順治の「息継ぎ」の良い例と言えるかもしれない。まさに、日本語の段落に英語のパラグラフを入れて論理的な方向に進めるように求められている現在においては、逆行するように思われる。

ただし、段落を設ける目的として7つ挙げているのは興味を引く。説明することがらを変えるため、説明する視点を変えるため、説明を新しい段階に移すため、特定のことがらを強調するため、関連性のない前後の2つの段落をつなぐという橋渡しのため、文章の書きはじめの部分を明確にするため、全体の文章の結びを明確にするため、の7つの目的が列挙される。具体的な説明がない為に判断しにくいのが、それに解釈を加えていくと、興味深いものになる。例えば、第1と第2は、ある1つのことがらを変える時に、しかもたとえ同じことがらであっても視点が変われば改行し、第3は、ある1つのことがらとある1つの視点が一通り出れば改行して、新しい段階に移行し、第4は、説明する過程で、何か特定のことがらを強調したい時にはそれを新たな段落として設け、第5は、関連性のない段落同士をつなぐことができ、第6と第7は、全体の文章の最初のはじめの部分と最後の結論である結びの部分の部分を明確にすることができる。つまり、段落間の関係を見ることで、全体の文章の流れを良くすることにつなげていくことができるからである。

阿部紘久（2013：194）は、さらにさらに短い説明で終えている。その為に、八木和久と同様に、現在の日本語の段落の問題の意識はなく、ただ1つの段落は1つの意味の固まりを示し、その内容は1行で要約できる程度に絞るべきで、それ以上の内容を1つの段落に詰め込むべきではなく、逆に短い段落の方はいくら短くても構わず、そこに独立した意味があれば、1つの短い文で1つの段落を形成することもできる、と言う。ここで、注目すべき点は、実際には段落が短くなる傾向が存在することを認めながらも、一般的には短すぎる段落を嫌う傾向があるが、それとは正反対に、1つの段落＝1つの意味の固まりを原則にして、1行で要約できる分量にすべきであると、しかも1つの短文＝1つの段落をはっきりと認めることである。極端な言い方をすれば、全てが1つの短文から成る段落によって構成され、単なる短文を列挙した箇条書きでも、良い文章になる。評価の分かれるところである。

泉忠司（2009：142～151）は、英語のパラグラフの優位性を前面に出し、英語のパラグラフを日本語の段落に導入することを強く求める。すでに述べたように、日本語論文作成術の本の中で、「パラグラフ・ライティング」を推奨しているのは、木下是雄の『レポートの組み立て方』と小笠原誠の『読み書きの技法』と戸田山和久の『論文の教室』の3冊だけであると言って、英語のパラグラフの推奨をはっきりと宣言しており、彼らの影響を強く受けている。特に、段落とパラグラフの明確な区別を力説して、「パラグラフ・ライティング」は欧米の論文作成指導においては基本中の基本であるが、日本ではどういうわけかそうっていない、と言う。段落は、「段落



分け」の言葉が表すように、大きな文章をとところどころで「分ける」ことであって、特にルールがあるわけではなく、何となく話題が変わったところで切ってみたり、読みやすさを考慮して量的にちょうどよさそうなところで切ってみたり、恣意的に「段落」分けをするのが通常であるが、パラグラフは文章全体の基本構成単位で、大きなものを分けることでできあがったものが「段落」だとすれば、大きなものを作るためのブロックのようなものが「パラグラフ」だと考えればよく、段落は内容よりは長さに重点が置かれることが多いから、一つの段落にいろんなことが書いてあってもいいし、逆に段落を2つや3つに分けてひとつのことを言うことも構わないことになるが、パラグラフでは「1パラグラフ1トピックの原則」がある、と言う。ともかく、論文とは論理性が命の文章で、ある意味日本語のよさである曖昧性を論文では極力排除しなければならない、と言う。

今回の資料の中で、最も明確に英語のパラグラフの重要性を訴え、特に論文作成における英語のパラグラフの中心性を訴えるテキストである。内容的に言えば、段落は、ルールはないが、通常、話題が変わる時、そして分量を調節して読みやすくする時の2つのケースで分けられ、いわゆる「段落分け」であって、内容よりも長さが重視されるからこそ、1つの段落にいくつもの話題を書いたり、逆に1つの話題をいくつもの段落で書いたりできる訳で、日本語の曖昧性が端的に現れるところであるとされる。それとは反対に、パラグラフは、「[パラグラフ・ライティング]とは、一言で言うと、「パラグラフ」を基本単位として文章を構築するライティング技術のこと」と言うように、あくまでも文章全体の基本構成単位のことであって、「1パラグラフ1トピックの原則」が貫かれ、特に論理性が命である論文ではまさにそれしかないとされる。これまでの検討で明らかかなように、段落の大→小の流れとパラグラフの小→大の流れの対比が広く浸透し、ここでも段落の大→小への分割とパラグラフ小→大への拡大が見られる。また、外山滋比古の煉瓦、木下是雄の煉瓦と同様に、ここでも同様のたとえが使用され、それがブロックである。それらは、勿論堅固や剛健を表すもので、文章の構成単位であるパラグラフが外的にも、内的にもいかにしっかりしているのかを表す為に使用されるのである。

以上の10名の著者の主張から分かるように、段落とパラグラフの特徴づけについては、「段落」や「パラグラフ」の言葉の使い方によって様々なものが存在するように見えるが、例えば、日本語の「段落」には、一方には日本語特有の段落（形式段落と言われるもので、明治以降輸入された paragraph の訳語として、しかも形式（改行＋1字下げ）のみが重視され、内容が取り残されてきたとされるが、これすらも英語からの輸入であって、日本語特有とは言えないが）が含まれ、他方では日本語における曖昧な、漠然とした、脆弱な、欠点のある段落を英語のパラグラフを導入することで補い、よりよい日本語の段落へ向かわせようとする傾向（段落の内容の面を英語のパラグラフで充実させるようとする願望あるいは目標あるいは行動計画）も含まれており、その点を考慮すると、日本語の段落への英語のパラグラフの導入、日本語の段落の英語のパラグラフへの同化、結果として、日本語の段落の改善という1つの大きな流れが存在するし、それがまた日本の現状を表すものでもあると言える。その評価は別にして。

ただし、注意しなければならないことがある。扱う対象のことである。日本語において、「段落」を考える時、上記で示したように、例えば、論理的文章と文学的文章を区別すれば、両者とも「段落」に入れて段落を捉える人もいたし、論理的文章だけに限定する人もいた訳であり、例えば、実用的文章の中で論理的文章（論文、レポートなど）、ビジネス文章（新聞記事、企業の販売用パンフレットなど）、日常的文章（手紙、日記、パソコンのメールなど）などに区別すれば、3つ全てを入れた人もいたし、論理的文章だけに限定した人もいた訳で、段落の対象である

文章が何であるのかによって、「段落」の形式と内容は当然異なってくる。もし論文だけに限定して「段落」を使用すれば、極めて論理性の高い論文において英語のパラグラフの重要性に反対する人は少ないであろうし、逆に文学に限定すれば、賛成する人は皆無であろう。なお、今回の資料は、対象の幅にはばらつきがあるが、基本的には論理的文章あるいは実用的文章である。

## 7. 段落の内容について

段落とパラグラフの関係が明らかになったので、次に段落の内容を具体的に見ることにする。それはまた、パラグラフを見ることでもある。つまり、欠落していると言われる段落の内容をパラグラフで補う傾向が現在の日本の特徴であると捉えられるからである。

外山滋比古（2010：60～62）は、日本語の段落は1字下げの慣習を外国の真似をしているので相違はないが、その内部構造は全くの自由で、何もない、と言う。そのような内容欠落の日本語の段落も、段落は必要であるとして、1段落の長さを問題するだけで、最後に「段落と段落の間の論理は、すこし飛躍していた方がよいようである」と言って終えている。勿論、ここから段落の内容を得ることはできない。強いて言えば、段落間に内容的に、あるいは意味的に区別できる相違が必要になるくらいで、後はある程度の長さで切るとしか言えない。

木下是雄（1990：157～166）は、本格的に英語のパラグラフの導入を図り、パラグラフにはトピック（段落話題）を言う文、つまりパラグラフで何を言おうとするのかを一口に述べた文で、中心文（トピック・センテンス）があるのが建前で、パラグラフに含まれる他の文は展開部の文で、中心文で一口に述べたことを具体的に詳しく説明するものか、あるいはそのパラグラフと他のパラグラフとの関係を示すものである、と言う。これが内容欠落の段落に注入される内容で、パラグラフ＝中心文＋展開部の文という構成になり、これが基本的な内部構造になる。従って、中心文と関係ない文や、中心文と反対のことを言う文を同じパラグラフに書き込むことはできず、中心文はこの意味でパラグラフを支配する、と言う。極めて強い支配関係として捉えられ、あくまでも中心文がパラグラフ全体を支配することになる。

その中心文の位置については、パラグラフの頭と真ん中と最後の3つが示される。例えば、報告・説明・論述などの文章では重点先行主義に従ってパラグラフの頭に中心文を書くのがよく、欧米流の作文教育では、「中心文はパラグラフの頭に書け」と強く言われ、従って各パラグラフの第1文だけをひろい読みしていけばおよその内容がつかめるのが通例であるが、小説、随筆などの文芸作品は別であり、またレポートや論文でも中心文の必要がない（慣習として中心文を省く）場合もあり、例えば、概要、著者抄録、序論の中の研究紹介などがある、と言う。ただし、中心文を末尾や中間に置きたい場合、中心文がないほうがいい場合、先行するパラグラフとの関係を示す文または句を書くことを怠ってはいけなくと警告し、それは読み手がパラグラフが変わればトピックが変わることを期待するからであるとしている。そして、展開部は中心文の内容を読み手に納得させる役割を負っているので、実例、その他の材料が必要で、しかも材料が具体的、特定のほど説得力が増すし、わき道にそれず、できるだけ中心文と直結した書き方をすることが重要である、と言う。

ここで、日本語の段落の内容、言い換えると、英語のパラグラフの内部構造が明白になる。かなり前に引用した「文章の一区切りで、内容的に連結されたいくつかの文から成り、全体として、ある一つの話題についてある一つのこと（考え）を言う（記述する、主張する）もの」というパラグラフの定義と上記のパラグラフ＝中心文＋展開部の文という内部構造が出揃うことで、パラグラフの姿がはっきり見えてくる。それは、英語のパラグラフの姿であり、各パラグラフの先頭

に中心文を置き、その後いくつかの展開部の文が続くもので、そのようなしっかりしたパラグラフが煉瓦であり、煉瓦を1つ1つ積み重ねて煉瓦建ての家ができ、文章ができあがる姿であり、各パラグラフの先頭の1文だけをひろい読みすれば、それだけで文章全体の概略や要約が分かる姿である。なお、この姿は、現在の日本の姿でもあり、以下の検討も、基本的にはこの考えは共通している。

石黒圭（2009：244～245）は、4つの段落分けの規準を提示する。第1に、中心文を核にして内容のまとまりで区切る、第2に、文の流れを重視して文間の意味的な距離で区切る（2文間の意味的な距離が近ければ区切らず、遠ければ段落で区切る）、第3に、話題や場面で区切る（話題や場面には大きいものと小さいものがあり階層性の問題が出てくるので、その回避の為に、段落にタイトルを付けることを提案している）、第4に、段落の長さで区切る、という4つの方法で、現実的には複数の規準の組み合わせで区切っている、と言う。

また、石黒圭（2014：208～209）は、段落はパワーポイントのスライドのようなもので、段落を短く区切ることで文章にリズムが生まれ、読みやすくなるが、短い段落が続くとリズム感があり、読みやすいが、頭に残りにくいという弱点があり、それを避ける為に、1枚1枚のスライドに見出しを付けるように、段落にも見出しを付ければまとまりがよくなる、と言う。その文章のリズム感の例として、段落の先頭にある接続詞に注目して、接続詞を連鎖させることで文章の意味のネットワークが形成される、と言う。

4つの段落分けの規準にしる、パワーポイントのスライドのように短い段落の連続にしる、各パラグラフの見出し（タイトル）にしる、現実的な対応の仕方の問題であり、どのような文章なのか、誰を相手にするのか、何が話題なのか、どの場面なのか、様々な要因によって異なって来るもので、一概に言うことはできない。段落の長さについては、後でまとめて検討するが、段落は短ければいいというものではないし、それに見出しを付ければいいといいものでもない。勿論、多くの人が言うように、段落が短くなってきているのは事実であり、それが最近の傾向であるが。

古郡廷治（2006：80，81～94，125～129）は、段落は主題を持ち、主題文は段落の中で核をなす文、論理展開の中心をなす文で、主題文以外の文は、主題文で説明したことを、さらに詳しく考察したり、説明したり、例で示したり、敷衍したりするが、主題はどんな段落にもあるというわけではなく、短い文章には主題がない、と言う。これはごく普通のパラグラフの説明で、パラグラフには主題があり、パラグラフ＝主題文＋それ以外の文になると言っているにすぎない。次に、文の接続について、文の結束性を重視し、接続詞と照応詞を詳しく説明している。さらに、事実と評価について、論文やレポートの文章に事実と評価が入り混じった書き方をすると、論理が飛躍したり、主題が変わってしまったりして、文章が落ち着かなくなるので、その混在を避けて分離する必要がある、別の段落で扱う方がいいであろう、と言う。ここで興味を引くのは最後の指摘である。客観的な事実の部分と主観的な評価の部分は本来異なるものであって、特に読み手にとっては、どこが事実で、どこが評価なのかは非常に重要なことであり、論文などのような倫理性だけでなく、客観性も強く求められる領域では、その境を明らかにすることは重大事である。その方法の1つとして、段落分けは有効になる。

また、古郡廷治（2014：80～91）は、段落は主題を持ち、それを表明する主題文を持ち、一般に文の主語が文頭に来るように、段落の主題文も普通段落の先頭に来る、と言う。これは、すでに問題にしたように、文の主語の位置と段落の主題文の位置を対応させ、質的に異なる文と文章を同一化するものであって、主題文が段落の先頭だけでなく、中間にも、また最後に来ることがあるし、さらに主題文のない段落もある訳で、文とは全く異なるものである。勿論、文は、平叙

文の場合、主語が文頭に来る構造で、文中や文末に来ることはないし、主語なしもないからである。ともかく、木下是雄の文と文章の同一化（SVO型とSOV型の文レベルの構文規則をそのまま文章レベルに当てはめる考え）と同じもので、日本で一般的に見られる傾向であり、その根強さの証明とも言える。しかし、この種の構造的矛盾は大きな危険性を持っているので、気を付ける必要がある。

さらに、理解と誤解に注目して、読みやすさの意味を示す。「行間を読む」は推論と同義で、世界知識（これまで蓄積してきた知識や経験）を使って推論し、文章を理解するとして、その際に生まれる誤解の可能性を読者に起因する誤解と著者に起因する誤解に分けて、それぞれ2つの種類を挙げている。読者に起因する誤解は、第1に、世界知識を著者と共有していない場合に生まれる誤解であり、第2に、著者の意図とはわざと違った理解をする場合に起きる誤解で、曲解と言われるものである。そして、著者に起因する誤解は、第1に、文章が難しすぎることから生じる誤解であり、第2に、構造が乱れていたり、論理が破綻していたりする文章を書いてしまったことから生じる誤解である。これらは書き手と読み手の両者の努力を求めるものであり、両者の責任分担を明らかにするものであるが、むしろ意図を伝え、理解することの困難性という根本問題に起因するものであり、話し言葉であれば、非言語的行動（体や顔や目の動きなど）を伴うので理解しやすくなるが、特に書き言葉では、非言語的行動がないだけに、文章だけから理解するしかなく、それだけ困難性が高いし、特に論文やレポートにおいては、論理性や構造的性が強く求められることになる。

三浦順治（2009：116～150）は、非常に詳しく段落の説明を行っている。すでに引用したように、段落（パラグラフ）は思考の単位で、形は「字下がり書き始めてから改行の前まで」で、内容は「段落は文章の中のひと区切りで、『1つの話題』を明確な、説得力ある、関心を引く方法で展開する、文のつながりである」とした上で、段落＝話題文（トピックセンテンス）＋支持文（サポート）とし、話題文の位置によって3つの段落の基本型を挙げる。なお、話題文とは1文で言える事柄で、残りの文はひたすら話題文の内容を詳しく説明したり、実例を上げたり、前後の文をつなげたりする、と言う。また、話題文はトピックセンテンス、主題文、中心文、予告文などの名前もあるとしている。

話題文が段落の最初に来る場合を直進型段落（図示すれば直立三角形型）と呼び、段落に方向付けがあたえられ、言おうとしていることがストレートに理解される利点を持ち、中間や末尾に来る場合と比べて誤解や混乱がはるかに少ない。話題文が段落の中間に来る場合を方向転換型段落（図示すれば砂時計型）と呼び、直立三角形型に比べて説得力が強く、直立三角形型は情報を鮮明に伝達する点で有効であるが、読み手の心を動かし納得させる心理的力は砂時計型の方にある。話題文が段落の最後に来る場合をクライマックス型段落（図示すれば逆三角形型）と呼び、じっくりと読み手を説得していくのによい。話題文が末尾に来るほうが最初に来るよりも印象に残る。人間の思考の型が本来末尾型であるからである。

段落における話題文の位置（最初、中間、最後）によって分類し、それぞれの特徴を明らかにすることは重要であるが、余り強調しすぎると、一般的に言われているのとは反対に、必ずしも最初に置く必要はなく、どこでも構わないという印象を受けらるであろう。また、人間の思考の型は本来末尾型であると言うが、これはSOV型について「頭の中で考えるときも同じ順序のはずだ」と木下是雄が言うのと同じ考えである。

両者に共通していること、つまり一般的にそう考えられているのは、経験の順序と論理の順序の取り違えに原因があるのであろう。経験的に（言い換えると、実際の時間経過に従って）個々

の具体的なものから結論という重要なものに辿り着くのが経験の順序であるが、演繹法や帰納法があるように、論理的には経験的な時間経過に関係なく順序を変えることができるのであって、従って「人間の思考の型は本来末尾型である」が経験の順序を意味するのであれば妥当であるが、論理の順序を意味するのであれば妥当性はなくなってしまう。むしろ、だからこそ、論理性を重んじる欧米では、論理性に貫かれる論文やレポートでは、話題文を段落の最初に置く方法が実行されているのであり、それはあくまでも論理の順序なのである。別の言い方をすれば、実際の時間経過に沿って得られる経験を、そのまま時間経過に従って言っても、相手は理解しにくいし、説得力がないが、それを頭の中で整理して、中心になるものを最初に持ってきて順序を変えて言うことで、何を言いたいのか（話し手の意図）が明確になり、伝わりやすく、説得力のあるものになるのである。

次に、話題文に適切な文の構造が取り上げられる。文の構造には単文、重文、複文、重複文の4つがあるとして、主語と述語の関係を1組みだけ含む文で、最も理解容易な文である単文から、1文中に単文、重文、複文が混在する文で、最も理解困難な文である重複文までを説明し、調査の結果によって、分かりにくい話題文として、話題が複数になる重文、学生の好きな重複文、即時理解の範囲を超えた長すぎる文（13文節を越える）の3種類があることが分かったと言う。勿論、1段落・1話題と1話題・1話題文の原則に従う限りでは、1つの話題が1つの文の中に納められる単文が最も適切な種類の文になり、複数の話題が混在し、関わりがはっきりしない重複文が最も不適切な種類の文になるのは当然のことである。

また、支持文に関連して、サポートを効果的に展開する方法として、時間（時間の順序に従って並べる）、空間（空間的に左から右へ、上から下へ、近くから遠くへ）、単純から複雑へ（単純な見慣れたものから複雑なものあるいは見慣れないものへ）、比較あるいは対照、一般的から個別へ（メインアイデアあるいは一般的印象から実例などの詳細な事柄へ）、クライマックス（特定のものから始めて最後に完成させる）の6つの型があり、実際には複数の展開が一緒に使われると言う。これら6つの展開の型は、先述のように、経験の順序と論理の順序と両者の混合のことについて言っているものであり、ただその意識がない為に、分類されることなく並べられているのである。

同様のことは後でも繰り返され、三浦順治（2012：75～83,92～94）はトピックセンテンスが最初に来るトップ型、トピックセンテンスが中間に来る中間位置型（方向転換型）、トピックセンテンスが最後に来る最終型（クライマックス型）という具合に、言い方を変更しているが、「われわれの思考の型が本来末尾型である」はそのまま残されている。

段落（後には、パラグラフ）の特徴づけも繰り返されているが、後者の方がより詳しいので、それを利用する。外山滋比古の英米人のパラグラフ＝レンガと日本人のパラグラフ＝豆腐、林四郎の西洋型文章＝鉄筋コンクリートの鉄骨という骨組み型と日本の文章＝話術、木下是雄のパラグラフ＝煉瓦と文章＝煉瓦建ての家、ジョン・ハインツの日本語の段落＝てんぷら（余分なことが多くて形が定かでなく、中身を知る前に衣を取り除かなければならない）などと言って、彼自身は「風呂桶型パラグラフ」と呼び、風呂桶の中の汚れた半透明な水の中に、不規則にサポート文が浮かび、底のほうにトピックセンテンスがぼんやりと見え隠れしている風景であると言う。日本人は何かにととえるのが好きなようで、何かを直接言って、意味（真意、意図）をより明確に、より効率よく伝えるのではなく、かえって意味をぼかす結果をもたらす傾向があるが、それはともかくとして、英語のパラグラフが煉瓦、鉄骨にととえられ、日本語の段落が豆腐、話術、てんぷら、風呂桶にととえられるのであり、そこに理解困難性あるいは理解不可能性の原因を求

め、結果的に説得力のないものとして批判されるのである。

井下千以子(2013)と西田みどり(2012)はごくごく簡単に触れる程度で、内容的にもすでに述べてきたことと変わらないものなので、省略する。八木和久(2007)も同様であるが、1つ注目する点がある。それは、「中心文がはじめに書いてある段落が続くと、全体が単調になってしまうし、なによりも、前の段落とのつながりを表す文をはじめに書いたほうがいいときもよくあります」という点である。これまでの検討ですでに明らかなように、一般的には、段落(パラグラフ)の最初に中心文(話題文、主題文など)を入れることが大原則のように主張されているのであって、その中であって、中心文が最初に来る段落が続くと全体が単調になり、従って中心文ではなく、つなぎ文を最初に置くことも改善策になるとされているからである。そして、段落のはじめと真ん中と終わりの3カ所に置ける訳で、従っていつも段落のはじめに中心文をもって来るよりは、そのときそのときの状況に合わせて「臨機応変に」中心文の位置を決めればいいのか、と提案する。「臨機応変に」と提案するのは、現実に対応であると言え、現実的であるが、余り「臨機応変に」と言うと、結局段落の内容は特にルールはなく、自由勝手に何でも書けるとなり、一般的に日本語の段落とされていることと変わらないものになり、せっかく中心文＝段落の最初の原則に抵抗したのに、その意味が薄れてしまうことになる。

泉忠司(2009:146~151)は、パラグラフの内部は①トピック・センテンス②サポーティング・センテンス③コンクルーディング・センテンスの3つの要素から構成され、①を序論、②を本論、③を結論と考えれば、パラグラフは論文の本体部分の型とそっくりですと言ひ、文を段落に拡大適用する方向ではなく、文章を段落に縮小適用する方向を取ることによって一般的な考え(木下是雄など)とは逆方向に進める。しかし、そのすぐ後で、日本語と英語を比較して、「これはSOV言語かSVO言語かというあたりに由来しているのだが、このような文の特徴は文章になっても維持されていて」、結局重要なことを真っ先に言うのが英語の特徴で、重要なことを最後の切り札に取っておくのが日本語の特徴であると言ひ、前とは反対に、文を段落に拡大適用する方向に進む。

そして、これは好みの問題で、どちらがいいかの問題ではないけれど、「論文において」という条件がつくと話は別であると言ひ、論文への限定性を強調し、最後に「日本語の文構造自体は日本語で書く以上変えられないが、せめて文章構造だけでも英語式にすることで、論文の質を無条件に向上させられる」と言ひ、結局文と文章を「別扱い」することで、文には日本語特有のものが適用され、文章には英語特有のものが適用されるところで処理されるのである。

文と文章の間を行ったり来たりしているように見え、逆走と迷走のように捉えることができるが、むしろ文と文章の完全な切り離しとすみ分けと捉える方が、彼自身がどう思うかは別にして、興味を引くし、そちらの方が正しい方向であると思える。すでに指摘したように、渡辺哲司(2013)にも同様の考えが見られる。そして、文と文章の関係についてはすでに詳しく記述した。端的に言えば、文の中の構造と「文を越えて」文章の中の構造は全く質的に異なるものであって、それは日本語や英語だけでなく、全ての言語が文構造と文章構造という2層性を特徴としており、従ってあくまでも文法が扱うのは文構造であって、文章構造には別の規則あるいは慣習を適用するしかないのである。

さらに1つ気になるのが、「文章の達人なら「日本式話題飛びまくり型」で「論文」を書いても、ダイナミックで面白く、話題に富み、それでいて論理的整合性も完璧な「論文」に仕上げることも不可能ではないですが、素人は「パラグラフ・ライティング」で攻めるのが1番!」と泉忠司(2009:162)が言うところである。あくまでも素人の学生相手にライティング指導の一環

として文章構造の説明があるとするのであれば、慣れてきて文章作成が一人前にできるようになったら、もう必要ないものになってしょうなものなのか？もしそうであれば、1パラグラフ＝1話題、1話題＝1話題文、話題文＝パラグラフの最初などは、文章作成の規則あるいは原則ではなく、単なる初心者向けの指導事項にすぎないものになってしまう。勿論、そこまで限定化するのは危険である。

渡辺哲司（2013）は、段落とパラグラフの内容について、具体的な詳しい説明を行っていないので省略する。

## 8. 段落の長さについて

段落について、形式段落であれ、意味段落であれ、その他の段落であれ、やはり最も興味があるのは段落の長さである。1つには、様々な文章を読むと、筆者によって段落分けが異なり、あたかも規則や原則が全く存在せず、気分次第で、好き勝手に自由に区切っているかのような印象を受けることがあるからである。また1つには、その結果として、ただ言えることは、長くなりすぎたので、適当なところで区切るしかないように思える。それが唯一の規則あるいは原則と言えるものかもしれないという印象である。

外山滋比古（2010：60～61）は、大体の目安として1段落200字から300字の長さが標準であると言う。そして、昔は400字原稿用紙1枚で改行するのがよいとされたが、今では長過ぎで、ここ2、30年で段落は平均して短くなっており、段落が短くなる傾向が注目すべき点であると言い、最後に、文章全体は、25段落だとして、平均150字～200字書くとすると、3750字から5000字、つまり400字原稿用紙で9枚から12枚くらいの長さでまとめることができると言う。

木下是雄（1990：165～166）は、パラグラフの長さはトピックの立て方に密接に関係するとし、また一文だけのパラグラフは原則として書きべきでないが、(a) いくつかのパラグラフでつづけて扱ってきた問題から次の新しい問題に移る場合、その移り変わりの文を書くとき（「ここで逆の面から問題を見直そう。」）、(b) その一文が何行かにわたるもので、前後のパラグラフから独立してまとまった内容をとっているとき、そのようなときは例外を認める。そして、複数個の文から成るパラグラフの長さには制限がないが、それでも「標準的な長さは？」と無理に訊かれれば、私は「目安として200字、長くても400字」と答える。長すぎるパラグラフは人に読む気を失わせる。みじかすぎるパラグラフがつづく、散漫な印象を与える」と言う。

石黒圭（2009：245～246）は、1文1段落の文ばかりでは段落が短すぎ、1文章1段落の文章では段落が長すぎ、要は程度問題であるが、段落は表記上のルールである以上、紙面との関わりが問題になるとして「以前、読点のところでは1行1文平均くらいが読みやすいと申しましたが、段落の場合は1ページ（または1段）平均3～5くらいが読みやすいと思います」と言う。なお、文字数は言及されていない。

三浦順治（2012：99～100）は、パラグラフの長さは決まっておらず、内容がまとまっていれば、どんな長さでもよいと言う。ただし、内容が複雑になるほど長くなる傾向（例えば、子供向けの本と大学のテキスト）があり、昔に比べると、現代の方が短くなっているし、新聞記事では1パラグラフ1センテンスを日本語・英語でよく目にする特徴づけた後で、実用文での1文パラグラフは奨めないと言う。そして、大事なことは、実用文は短く、速く書くのではなく、正確に明晰に読み手に迫るものであるとする。さらに、文章を書く際には、パラグラフの論理が必要であると同時に、目へのやさしい気配りが必要で、従って「長いパラグラフを2つに切ることは、センスの上から、意味の上から、あるいは論理的な展開の上から、必要ないと思われるときでも、

目のために気配りをしてやる必要がある」と言う。つまり、書き手の論理だけでなく、読み手の目への気配りでパラグラフを短く切る必要を訴えている。最後に、パラグラフの長さは決まっていなくても、小論文・レポートなどの実用文での一応の平均の目安は、1パラグラフ当たり、字数150～200字、45～80字程度のセンテンスが2ないし4、1行40字のワープロで4～5行であると言う。

八木和久（2007：20～21）は、段落の分量、段落を構成する文字数は明確には決まっていなくても、一般的には、200～300文字くらいまでにするのがよく、多くせざるを得ないときでも400文字くらいが限度ではないか、といわれているようです、と言う。しかし、段落の分量については、トータルの文字数よりも、むしろ作成された文章が掲載される印刷物の紙面（あるいは誌面）のレイアウトのほうを優先して考えるほうがよく、その場合は、通常10行程度までが目安で、多くとも15～16行程度までにとどめるべきで、もし20行を超えるような段落が続くときには、改行を減らすのではなく、文章を見直して全体の文字数を減らすようにするのが好ましいと言う。

阿部紘久（2013：194）は、経験的には1つの段落は250字程度までに抑えるべきで、例えば、1つの段落は1つの意味の固まりを示し、その内容は1行で要約できる程度に絞るべきで、それ以上を1つの段落に詰め込むべきではなく、従って1つの段落は自ずと250字程度までに収まるし、逆に短い段落はいくら短くても構わず、そこに独立した意味があれば、1つの短い文で1つの段落を形成することもできるし、そのように考えてくると、結果として1つの段落の長さは平均150～200字程度になり、例えば、800字の文章であれば、4～5つの段落から構成されるのが標準であると言う。そして、「それはあくまでも、およそのメドです」と言う。

段落の長さについて、具体的な数字を出しているのは以上の6名だけで、外山滋比古（1段落＝200～300字）、木下是雄（1パラグラフ＝200字、長くても400字）、石黒圭（1ページ＝3～5段落）、三浦順治（1パラグラフ＝150～200字、小論文・レポートなどの実用文に限定）、八木和久（1段落200～300字、長くても400字、印刷物の誌面のレイアウトを重視し、通常10行、長くても15～16行）、阿部紘久（1段落＝150～200字、上限が250字で、下限が1段落＝1短文）となる。数字だけを見ると、150～200字が2名、200～300字が2名、200字が1名になり、1段落の長さの下限が1短文から上限の400字までの幅があることになる。

段落の長さについては、勿論、制限はないし、明確に決められた文字数もないとする点で共通しており、当然のことであるが、それでも目安として文字数を入れる理由として考えられるのは、今回の資料が学習者向けの文章作成テキストであり、従って文章作成の練習の為には目安としてある一定の文字数を想定して、その範囲内で書かせる練習を行うものと捉えることができる。しかし、単にそれだけでなく、一般的な意味での実際の場面での実用的な目安としても考えられていると捉えることができる。そうであれば、それが私たちの文章作成の目安になる。

段落の長さについての様々な主張からも明らかのように、読み手側の読みやすさが重視され、それに合わせて、様々な基準で読みやすさを追求していると言える。それは、欧米の伝統的なレトリックの流れを受けて、説得が目的で、相手を説得する為には相手が納得する必要がある、相手が納得する為には相手が理解する必要がある、相手が理解する為には相手が興味を持って読む必要がある、相手が興味を持って読む為には短い段落（飽きずに読める長さの段落）である必要がある、というような説得性に基づくものである。

他方で、書き手側からすると、相手を説得させる為に書くにはそれなりの段落の長さが必要になり、短ければ良いとは単純にはいかないことになる。例えば、内容（簡単なものから複雑なものまで）、対象（子供から大人まで、また素人から専門家までの読み手のレベル）、方法（説得す



る方法の工夫) など、いくつもの要因が絡み合って段落の長さが決まってくる。勿論、自分の意図を相手に的確に伝達し説得することが目的である以上、直接関係ないことを書いて長くすれば曖昧になるし、逆に必要なことを書かずに短くすれば誤解が生まれるのであって、それらを考慮して段落の長さは決められ、さらに文章全体の長さとの関係も重要な決定要素になる。

## 9. 最後に

今回取り上げた14の資料は、あくまでも一般学習者向けの文章作成テキストであり、従ってその制約を受けるものであることを忘れてはいけない。それでも実際の文章作成の場面で、1つの目安として、1つの方向性として利用可能なものである。現実的に段落の規則あるいは原則のようなものが確定されていない以上、そのような状況下では、十分知る価値のあるもので、その意味で詳しく分析してきた。

文章作成と言っても、どのような種類の文章であるかによって大きく左右される。例えば、文学、哲学・思想、論文・レポート、ビジネス報告書、販売促進パンフレット、新聞、手紙、日記、メモなど、言い出せば切りがないほど数多くある。しかし、全てを網羅する、一般的な法則のようなものを確立するのは困難であり、むしろ何らかの分類をして、その特徴づけをする方が現実的である。そこで、1つの分類基準として考えられるのが、説得性と非説得性である。例えば、実用的文章と文学的文章がよく対比されるが、その現れである。あくまでも相手を説得することを目的にする文章とそうではない文章を区別することができるのである。そして、今回の資料の多くが論文・レポートの文章作成に関するもので、その意味で、説得性に属するものであり、しかも説得性の中でも、特に論理性を重んじる文章であり、説得性+論理性と言えるものである。そのような制限の下では、これまでの分析は十分意味のあるものである。次の問題は、説得性+論理性の文章を、説得性+非論理性の文章や非説得性の文章にまで拡大できるのかである。もしできなければ、別の視点からのアプローチが必要になってくる。

すでに指摘したが、ここでもう1度強調したいのは、文と文章の明確な区別（質的に異なる文と文章には異なる説明が必要で、文には文法的な説明ができるが、それを文章に適用することはできず、従って文章にはそれ特有の説明が別に必要になってくる）と日本語の段落と英語のパラグラフの同一化（「段落」と言っても、英語のパラグラフを取り入れて、それを日本語の段落にすることを意味し、日本語特有の段落は形式段落として否定的に見られ、積極的な意味での日本語特有の段落は見られない）の2点である。それは、文は日本語文法によって規定されるが、段落はたとえ日本語の文を使っても、全く別の構造を持ち得るのであり、しかも英語のパラグラフが段落を埋める唯一のものではなく、別のもので埋めることも可能になることを意味する。そして、形式段落（改行十字下げ）は否定的に評価されているが、むしろこれこそが日本語、英語など全ての言語に適用できる唯一の一般的な法則で、それ以外は何も制約しない方が良いと考えることもできるであろう。

## 注：

(1) 村越行雄「句読点の方法論的分析ー読点をどこに、なぜ打つのかー」『コミュニケーション文化』第7号（跡見学園女子大学文学部コミュニケーション文化学科紀要）、pp.1~11

村越行雄「読点の事例研究一本多の読点論と統語論的読点ー」『コミュニケーション文化』第8号、pp.1~6

(2) 今回使用した資料は以下の14冊である。なお、あくまでも書店で入手可能な資料だけを集めたもので

あって（特に、一般学習者の現状を知る為に、一般学習者向けのテキストに限定して集めた）、必要な資料全てを網羅している訳ではないことを、ここ断っておかなければならない。

阿部純久『短文から長文まで、もっと伝わる60のテクニック 文章力の決め手』（日本実業出版社、2013）、  
「第12章 長文をスッキリ構成する 段落とその骨子」 pp.194～195

石黒圭『よくわかる 文章表現の技術 I 表現・表記編』（明治書院、2009）、「第12講 段落の考え方」pp.237～254

石黒圭『「うまい」と言わせる 文章の裏ワザ』（河出書房新社、2014）、「段落は短く分けると読みやすい」 pp.204～214

泉忠司『90分でコツがわかる 論文&レポートの書き方』（青春出版社、2009）、「第4章 とうとう執筆 突入！ーパラグラフ・ライティング」 pp.142～196

井下千似子『思考を鍛える レポート・論文作成法』（慶應義塾大学出版会、2013）、「4 パラグラフの書き方」 pp.99～103

木下是雄『レポートの組み立て方』（ちくまライブラリー、1990）、「4.5パラグラファー説明・論述文の構成単位」 pp.156～166

外山滋比古『文章力 かくチカラ』（展望社、2010）、「段落」 pp.58～62

西田みどり『誰でも書けるレポート講座 く型』で書く文章論』（知玄舎、2012）、「第1章 文章表現の基本、【2】パラグラフライティング」 pp.23～32

八木和久『文章作成のキーポイント』（米田出版、2007）、「§3 おさまりのよい段落にする」 pp.18～25

古郡廷治『論文・レポートの 文章作成技法 論理の文章術』（日本エディタースクール出版部、2006）、「第3章 文章の構造と文章の展開」 pp.78～136

古郡廷治『文章ベタな人のための論文・レポートの授業』（光文社新書、2014）、「第4章 論文・レポートの「文章」のかたち」 pp.80～97

三浦順治『英語流の説得力をもつ 日本語文章の書き方』（創拓社、2009）、「第3章 段落（パラグラフ）を書く」 pp.111～152

三浦順治『グローバル時代の文章術』（創拓社、2012）、「第2章パラグラフは理論の単位だ」 pp.67～104

渡辺哲司『大学への文章学 コミュニケーション手段としてのレポート・小論文』（学術出版会、2013）、「VII くパラグラフく 考ー実用的な型の教え」 pp.135～148

- (3) 現在では、言語研究領域として、統語論、意味論、語用論の3大領域が挙げられるのが一般的である。それ以前は、語用論の認識が欠落していた為に、音韻論、統語論、意味論の3大領域が普通であった。これは言語学における分類であるが、元々は哲学から来たもので、語用論は哲学では言語哲学とされている。pragmatics という語はアメリカのシカゴ大学の哲学者モリスによって初めて使用され、同じシカゴ大学の哲学者カーナップと共に pragmatics を主張した。そして、その後の発展の中で、特に世界的に大きな影響力を持ったのがイギリスのオックスフォード大学の哲学者オースティンとアメリカのカリフォルニア大学バークレー校の哲学サールによる言語行為理論、そしてアメリカのカリフォルニア大学バークレー校の哲学者グライスによる会話含意理論である。また、統語論で世界的に有名なのがアメリカのマサチューセッツ工科大学の言語学者チョムスキーである。
- (4) 文 (sentence) はそれ自体として、あくまでも純粹に言語的なものとして見、従って文を使用する状況などは一切関係なく、むしろ全ての状況に適用できるような、普遍的な性質を持つものである。それとは区別して使用される発話 (utterance) は、実際に口から文を発するように、文が実際に使用されることを意味しており、話し言葉の場合である。なお、文を口から実際に発することで「発話」と呼ばれるように、文を手で実際に書くことが何であるのかの呼び名はまだない。ただ、「発話」を単に話し言

葉に限定して使用するだけでなく、言語全般に使用することがよくあり、その意味では、書き言葉もそこに含めることはできるが。

- (5) レトリックについては、古代ギリシャ時代の紀元前6世紀のコラクスとティシアスが最初と言われ、裁判での法廷弁論がその出発点になり、それに続いてプロタゴラス、ゴルギアスなど多くのソフィストたちがアテネなどで活躍し、レトリックは大発展する。しかし、一般的には、古代ギリシャ・ローマ時代のアリストテレス→キケロ→クインティリアヌスの流れを古典レトリックとされ、いわゆる正統派の古典レトリックと言えるようなものである。ただし、それではアリストテレス以前の紀元前5～6世紀に活躍していたソフィストたち、イソクラテス、ソクラテス（さらに、弟子のプラトン）の3つの大きな流れが見なくなり、レトリックの1面しか理解されないことになる危険性がある。ともかく、ソフィストたち、そして古典レトリックの最大の目標は「説得」であり、あくまでも相手が納得して初めて成り立つ説得のことである。従って、欧米のレトリックは、伝統的にも、現在でも、説得を最大の目的にするものである。